Japan Evangelical Lutheran Association

JELA NEWS

ジェラ ニュース　第19号　2009年８月15日発行　発行責任者　森川 博己

日本福音ルーテル社団　〒150-0013　東京都渋谷区恵比寿1-20-26　Tel.03-3447-1521　Fax.03-3447-1523　jela@jela.or.jp　www.jela.or.jp　口座番号 00140-0-669206　加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援／アジア子ども支援／ブラジル子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア（祈りのたて琴）研修講座／奨学金制度／宣教師支援

「私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます」

「お前たちは、わたしが飢えているときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言っておく。私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」　マタイによる福音書　25章35節～36節、40節

酷暑のインド・ワークキャンプ その働きに現地で驚嘆の声

JELAとJELCは２月２４日から３月６日かけて、５回目のインド・ワークキャンプを実施しました。キャンプ地はいつもと同じ、JELAが支援している、インド西部の総合的地域健康プロジェクト（CRHP）というNGOが活動している地域。全国の教会から合計７名の大学生と社会人が参加しました。40度にもなる酷書の中、黙々と作業に励む日本人を見て現地の関係者はその働きぶりに驚嘆の声を上げていました。現地の各人のレポート（P4）をご覧下さい。

[この号にはこんな記事が]

コンサートのエピソード・・・・・・２　リラ・プレカリア実習体験記（出村由利子）・・・・・・３　インドの病院が完成！・・・・・４　インド・ワークキャンプでの貴重な学びと体験・・・・・５　ブラジル・ボランティア報告Ｎｏ．１・・・・・・６　JELA歴史コラム５（長尾博吉）・・・・・・６　退職職員からのご挨拶（古川文江）・・・・・７　お知らせ（JELA百周年記念行事、職員募集、秋から冬の催しなど）・・・・・・８

世界の子ども支援 チャリティコンサート こぼればなし

６回目を迎えた「世界の子ども支援チャリティコンサート」、今年はレベッカ・フラナリーさんの妙なるハープの調べが全国を巡りました。来場者総数は約630名、捧げられた寄付金総額は62万円でした。会場で販売したＣＤの売上金の20％にあたる7万6千円も、レベッカさんのお申し出により、世界の子どもたちに捧げられることになりました。会場を提供してくださった東京、愛知、静岡、千葉、熊本、山梨の8つの日本福音ルーテル教会の皆様、ご来場くださった皆様、寄付金を捧げてくださった皆様、またコンサートの運営を支えてくださった協賛団体の皆様、ありがとうございます。

●M教会には、昔、愛する息子さんを失くされ、涙と共にその教会で葬儀をしてもらったという、一人の年老いた女性がコンサートにお見えになりました。ポスターに惹かれて、葬儀以来じつに46年ぶりにいらしたということです。「主のお引き合わせだと思います」と牧師先生がおっしゃっていました。音楽の力の大きさを感じさせますね。半生紀を経た後での教会との再会。どんな思いでハープの音色に耳を傾け、教会堂のたたずまいに目をこらしていらっしゃったことでしょう。音楽を聴いていただく楽しみを超えて、このコンサートを続ける意味を改めて考えさせられたエピソードです。K教会の礼拝にも、若いときに通っていたその教会に数十年ぶりで戻ってきたという、初老の男性がいらっしゃいました。午後からのコンサートも楽しんでおられたようです。こちらも心温まるお話です。

もう一つのエピソードを紹介します。レベッカさんはプログラムの最後に配された日本の童謡（「春の小川」「赤とんぼ」「さくらさくら」）を弾く前に、自分と日本文化との関わりについて、子ども時代の話をされました。アメリカのコネチカット州に住んでいた11歳か12歳のとき、日本から十代の若い女性のハープ演奏グループ二十数名がやってきたそうです。その中の二人がレベッカさんの家でホームステイをします。互いに相手の国の言葉は片言しかできなかったのに、ハープという共通の関心を介して、豊かな交わりができたといいます。このときにレベッカさんは初めて日本の音楽、それも「さくらさくら」という極めて日本的情緒の豊かな曲と出会ったそうです。琴を想起させるハープの音色は、日本の童謡や唱歌によくマッチし、今回の演奏会でも、この３曲に対してはひときわ大きな拍手がおくられました。司会の手を休めて聴いていた私も、「春の小川はさらさらゆくよ……」という小学校で習った旋律が静かにくりだされたとき、たとえようのない懐かしさと感動に包まれ、聴き入ってしまいました。そして、コンサートが終わったときです。一人の女性が近づいてこられ、レベッカさんの話に出てきた日本の若者の一団に自分もいたかもしれないとおっしゃり、驚きました。以下に、ご本人からのメッセージをご紹介します。
（森川）

偶然の再会

矢毛石　晴美（室園教会）

五月の末、私は健軍教会でのレベッカ・フラナリーさんのハープの演奏会に出かけました。レベッカさんのアイリッシュ・ハープの音色を聞きながら、自分の昔をおもいだしていました。

もう40数年前、私が10代の頃、少女だけのハープ・アンサンブルのメンバーとして1967年、1969年、1970年、1972年と4回アメリカ、イギリス、アイルランド、オランダ、スイスなど海外演奏旅行に参加しました。当時ハープのアンサンブルで常時演奏活動をしているのは私達だけで、特に少女だけでしたので珍しかったようです。アメリカで第1回国際ハープ・コンテストがコネチカット州のハートフォード大学で開催された時、私達はゲストアーティストとして招かれ演奏しました。日本人が日本の楽器を外国で演奏するのではなく、西洋の楽器を日本人が海外で演奏するのも、それぞれの国の人々にビックリされました。演奏旅行ではホテルに泊まる事もありましたが、アメリカではホームステイをさせていただくこともよくありました。演奏のない日はホスト・ファミリーの方達に観光に連れて行っていただいたり、受け入れて下さったグループの方達全員で歓迎会をしてくださったり、楽しい思い出が沢山出来ました。また直接家庭に入り文化の違いや環境の違いを知る事もできました。この頃の体験が私の生き方の原点になっているように思います。

レベッカさんのコンサートの最後の方で３曲、日本の曲が演奏され、その説明の時「えっ！」と驚く事がありました。レベッカさんが11歳のとき日本からきた女性ハープアンサンブルのメンバーの中の２人が、レベッカさんの家にホームステしたと話されたのです。隣で一緒に聞いている夫に「もしかしたら私達のグループかしら？」と少しドキドキしながら演奏会の最後までその音色に癒されながら聞かせていただきました。

そして演奏終了後、レベッカさんの所に尋ねていきました。「何年ごろですか？」「どこですか？」色々お話ししているうちに、やはり私達だとわかりました。私達が演奏した「さくら変奏曲」も覚えていてくださったことは感激でした。またそのときの外国の人と交わりを持つという経験から、コンサートのタイトルのように「世界の恵まれない子供達を救う」というひろい視野の演奏活動をなさっている事につながっていることにも感動しました。

私の人生の中で40数年前と現在がつながっていると思える素晴らしい再会が出来たのは、小さい頃私にハープを習わせてくれた両親、それを見守ってくれた兄、共に励ましあいながら練習をした妹、結婚してもハープを続けさせてくれた夫、協力してくれた子供達、指導してくださった先生方のお陰です。神様に感謝しながら、今の私の夢は「孫の歌に合わせてハープの伴奏をする事」です。

数十年ぶりの再会を喜び合うレベッカさん（左）と矢毛石さん（右）

知多教会

小鹿教会

田園調布教会

稔台教会

大岡山教会

本郷教会

健軍教会

甲府教会

２期生の研修講座もラストスパート。受講生の皆さんは4月からの3か月間、ホスピス（きぼうのいえ）や東京老人ホームで実習を行っています。受講生のお一人、出村さんの実習体験をご紹介します。

豊かで充実した時間

出村由利子

その日はいつもよりボーっとしていました。患者さんにご挨拶をして、窓を閉めたりして環境を整えた後、ハープを抱えてさっそく弾き始めると変な音が聞こえてきました。どうしたのだろう？　と不思議に思っていました。先生が（音程を調整する）レバーを下げてくださるまで、コードが違っているのに気がつきませんでした。そしてさあ完璧！　と思って再開しようとした時、さらにもう一つコードを下げ忘れていた音があり、先生が再び直してくださいました。そんな状態でした。何をしに来ているのかさえ忘れるぐらいで、ハープが傍にあるのでそういえば実習だわ、と思い出すぐらいボンヤリとしていました。

ボンヤリしていましたが演奏を始める際に、前回はこうしよう、ああしようと考えて、自分で曲を選んで演奏していた反省から、今回は何も考えずに「患者さんと一緒に。患者さんの傍にいる」と決めて、患者さんの目を見つめていました。温かい患者さんの眼差しのお陰だと思いますが、焦ることなく、曲が浮かぶまで目をそらすことなく見つめることができました。患者さんの目は片方義眼でしたが、どちらの目もしっかりと、何もかも見えていらっしゃるかのようなきれいな目をしていらっしゃいました。

とにかく頭に浮かんだ通りに従いました。喜びの明るい曲、ふんわりした曲から、もっと心を知りたいと短調に入り、一緒にゆらぎたいと子守唄、そして終わりかな、でも終わりという感じがしないわと思い、じっと患者さんを見つめていたら、ふとゴルゴダのイエスさまの十字架が頭をよぎり、その場面を思い出す曲が最後になりました。その曲が終わった時、患者さんが「感動しました」とおっしゃったので、終わりなのだと感じました。患者さんが手を合わせたので、その手を両手で包み、「こちらこそ、一緒に良い時間を過ごすことが出来ました。ありがとうございました」とお礼を言いながら泣きそうになりました。

前回も泣きそうになりました。でも前回とは違う涙だと思いました。一緒に満たされ、とても心地よい気持ちでした。患者さんの呼吸に合わせることだけに集中して弾き始めたら、自分が苦手としている曲を弾いていたことが二回ありました。右手も左手も弾き方をど忘れして頭が空っぽになることも何回もありました。そんな時は手を止めたり、弦を一本だけつまびいたりとめちゃくちゃでした。歌もハープの音もない沈黙の瞬間もありました。でもそんな時も普段と変わらず、穏やかな気持ちで、ただベッド脇にいることができました。患者さんの呼吸を意識するのを忘れて眼だけをずっと見て、慌てて呼吸を見て、歌の速度に追いついて、急にゆっくりしたテンポになったこともありました。そんな時は呼吸と合っていないと感じましたが、それでも私自身は終始心地よかったのです。最後はハープを抱えていることも忘れていました。

何が良かったのかさっぱりわかりませんが、とても満たされて、来た時より元気に軽やかに帰路に着きました。最近は、生活が忙しく、殆どハープも歌も満足に練習が出来ていないので演奏する手はめちゃくちゃで散々でした。もっともっと練習して自然に動くようにしたいと思いました。でもそんな私に大事なことを患者さんが教えてくださいました。練習不足の私に、学びやすいように呼吸も静かにしてくれて、緊張しないように穏やかに見守ってくださり、貴重な経験をさせてくださいました。時間のことも、最初から最後まで時計を見るのを全く忘れてしまっていましたが、終わりは患者さんが教えてくれるので、ただ患者さんについて行けば丁度良く終わるのだと思いました。通常の時間では35分だったようですが、それを超越した充実した時間の存在を実感したひとときでした。

実習後は先生と受講生で分かち合いの時を持ちますが、先生にも十字架が見えていたことを聞いた時、ええええーっ！　と本当にびっくりしました。神様があの場所に私たちと一緒にいてくださったのだと思いました。感動で涙が出て止まりませんでした。神様に心から感謝した一日でした。

講師のキャロル・サックを囲む研修2期生の方々。左から二人目が出村さん

第5回インド・ワークキャンプでの貴重な学びと体験

キリスト教がより身近なものに
斎藤公人（ルーテル函館教会）

インドに行く前にはかなりの不安がありました。特にキリスト教に関しては、今までキリスト教の友達や知り合いがいなかったので、まったくの未知のものでした。キリスト教ではないのが参加者の中で私だけであったので、疎外感を感じることもあるんじゃないかとも思っていました。いろいろな人との出会いで最も大きな出会いが重い病気を患っている患者との出会いでした。私はその患者と出会ったことで神様に感謝すること、他の人のために祈ること、常に神様に祈ることを学びました。この患者との出会いのおかげで、よりキリスト教が身近なものになったと思います。そして、私の周りにいる友達やスタッフがキリスト教を信仰していることにとても安心しました。

体験を通して知る共通点と相違点
中村祐樹（ルーテル武蔵野教会）

病院の見学などもあり、社会福祉の勉強をしている身としては日本との相違点など多くの発見をすることができました。インドでも日本と同じように、地域とのコミュニティが重要視されており、人と人との関わりはどこの国でも大切なのだと気づかされました。インドでの問題点も多く聞くことができ、中でも女性の地位の低さや地域格差の問題などは深刻でとても驚かされました。インドのきれいな部分だけでなく、抱えている多くの問題など、観光に行くだけではわからない多くのことを知ることができ、また多くの人たちと接することができたことから現地の文化や生活、人柄などを直接体験することができたので、とても意味のあるキャンプになったと思います。

インドの心・助け合いの心
堀川真理子（ルーテル田園調布教会）

事故で片足を亡くした一人の老人が義足を作ってもらいに来た。義足作りの工程で彼は何度も立ったり座ったりして試着をしなければならなかった。足腰の弱い老人は、ふらふらとよれながらこの作業を行っていた。その時、それを見ていた周りの、同じように義足を作ってもらいに来ている人々がすかさず椅子を差し出したり、手を差し伸べるなどして彼を支えたのだ。カースト制度の名残が未だ根強く残っているこの国の中で、貧しい人であれ位の高い人であれ、みんなが助け合っていた。この瞬間、私はこの国の人々の優しさを知った。現地の責任者であるショウバさんは、一番始めの私たちへのメッセージで、私たちは旅行本やメディアを通して知るインドではなく、「インドの心」を知るだろうとおっしゃった。最初はこの意味を理解することが出来なかったが、このプログラムに参加し実際にこの国の人々と触れ合った今、この言葉の意味を知ることができたのではないかと考える。

今までと異なる方向に歩みだす
黒野義明（ルーテル名古屋めぐみ教会）

ワーク以外でも出会った人に「ナマステ」（こんにちは）と声をかけたら、笑顔で「ナマステ」とこたえてくれた。日本にいるときには何気ない挨拶や行動でも、インドにいるときにはその一つひとつがとてもあたたかく、新鮮であった。自分が行動したら、それにこたえてくれる人がいることを実感した毎日であった。ワークキャンプ中の「主の祈り」の学びを通して、神様は私たちに必要なものをすでにご存知で、常に用意されていることを知ったが、私たちはそれを無駄にしている部分があるのではないだろうか。神様が与えてくださるものに目を向けずに、自分のことばかりに気をとられているのかもしれない。自分のためではなく、他者のために祈り、行動できるように、今までとは異なる方向に一歩踏み出していきたい。

前向きな姿勢を養う
谷口真実（ルーテル松本教会）

インドの人たちと共に働いていると、ワークキャンプということを忘れてしまうくらい働く自分と見つめあうことができる。言葉が通じない中、お互いの目を見て作業の仕方を教えてくれる人たちの暖かいこころが嬉しくてたまらなかった。少し失敗したときも、笑顔で大丈夫だよと私を、励ましてくれた。普段は、失敗すると投げやりな気持ちになってしまう私だが、もう一度やってみよう、どこを改善すれば良くなるのだろうと前向きにワークをすることができた。完成したときの達成感といえば、義足をもらっていく人々の笑顔が胸に焼きつくくらい嬉しいものであった。

たまたまの運命に感謝して生きる

高野結衣（ルーテル室園教会）

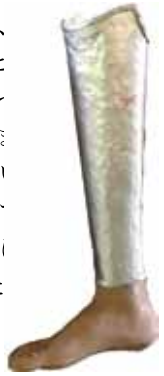
CRHPに行ったことで、例えば、貧しくて栄養不足になったり、十分な医療が受けられなくて苦しむ人達や子どもたちがいる現実や、他人事のように思っていたHIV/AIDSの真実などが現実的になりました。たまたまこの豊かな日本の家庭で生まれただけの私です。もし、私が貧しい国の貧しい家庭で生まれていたり、地雷の埋まる村に生まれていたら、私は今、足が片方なかったかもしれないし、病気だったかもしれない、もうこの世にはいなかったかもしれない。そういう運命だってあり得たし、それは皆もそうだから、このたまたまの運命に感謝して、利用して、私たちだからできる事!というのを見つけて、行動していきたいです。そうするべき位置にいるのだと思いました。

高齢者と若者が交流できるキャンプ

井上秀樹（ルーテル本郷教会）

洗濯小屋を作る作業では、レンガを積む作業は若い人達にまかせ、私はもっぱらレンガとコンクリート運びをやりました。日ごろの運動不足を解消する良い機会でした。いつもですと後で筋肉痛に悩まされるのですが、インドの気候と食事が良かったのか全く痛みを感じることはありませんでした。この種のワークキャンプは、おおむね若者達のために企画されたものと思います。そこに60過ぎの高齢者が参加することに多少の違和感はありましたが、若者からエネルギーを貰い、のお返しに多少の経験と恵を分かち合えればと思参加しました。世の中まだ元気なシニアがいっぱいのですから、ヤングばかりなくシニアもどんどん活動加したら良いと思いました

（写真：左より2人目、表紙の写真も）



インドCRHP病院が いよいよ完成。外務省NGO連携無償資金での医療機器も近々設置。

ポール星崎（JELA）

本年度の活動を左頁でお伝えしておりますように、JELAの義足製作のワークキャンプでおなじみのインド中西部、マハラシュトラ州ジャムケッドにあるNGO「総合的地域健康プロジェクト」(CRHP)では、老朽化した診療所を建て替え、本格的な病院の建設が進められてきました。この地域はインドの中でも貧しい地域のひとつで、義足の需要が高いのも、貧しさ故に入院できず、足のけがなどには切断を選ぶ人が多いからと言われています。

この地で30年以上、300を越える村の子どもや女性、そして「ロー・カースト」とよばれる、社会的に見捨てられた人々を中心に、総合的な健康増進運動を行なってきたのが医師アロレ博士と娘のショウバ医師です。この働きの成果として、地域の幼児死亡率が大幅に低下し、栄養失調や感染病がほぼ駆逐され、女性・子どもや社会的弱者の生活が大きく改善されました。しかし今でも子ども・女性が大事にされず、栄養価の高い食物が与えられなかったり、学校に行かせてもらえなかったり、暴力の犠牲になったりしています。このような状態を打開するためにCRHPは、子どもの生活基盤である家族とその地域の健康や社会での扱われ方などについて総合的な改善を目指して活動しています。

病院の建設にあたって、JELAは超音波画像診断装置など7点の医療機器購入費用のために、日本政府の「NGO連携無償資金協力」の補助金を昨年申請しました。現地とのインドペースののんびりした連絡・交渉や、外務省内の人事異動などにより、なかなか手続きが進展せず、一時はどうなることかとの不安もありましたが、補助金は3月に無事いただくことができ、病院も去る4月5日にようやく完成して、落成式を迎える事ができました。機器の搬入は本年8月頃と予定されており、設置されしだい、日本から機器を使った診療の訓練のために医師を派遣する事になっています。

落成式の当日は、JELAからも中川理事長、星崎、そしてこれまで現地との専門的な交渉を担当した元事務局長グリテベック氏が参加いたしました。ちょうどその日は棕櫚主日にあたり、聖別式には地区のビショップを先頭に門から病院まで施設で働く人たち数十人が手に手に棕櫚の葉を持ち、「ホサナ、ホサナ」と歌いながら行進しました。（写真右下）その後、別ホールで主日礼拝が行なわれ、聖餐にも与りました。午後は真っ赤なテントの下で落成式です。近隣から500人近い人々が集まり、地域の期待の高さを感じさせられました。式典では中川理事長が祝辞を述べ、またJELAへの感謝として花束や記念の楯をいただきました。

式典の後、参加者が病院内を見学し、小児病室で子どもたちが明るく過ごせるようにと、本年3月のJELAワークキャンプでボランティアが描いた動物の壁画が見学者の注目を集めていました。まだ一部を除いて設備類は設置されていませんでしたが、外には不足しがちな水供給のために雨水をためる大きな井戸や、頻繁に起る停電対策に自家発電装置も用意されていました。開院後には地域医療に大きく貢献する事でしょう。

その後、JELAの一行は東海岸のコルカタに飛び、LWSI（ルーテル世界連盟のインドの奉仕部門）の本部と都市プロジェクトの事務所を訪れました。今後のJELAの奉仕の可能性について話し合い、またスタッフの方に実際の活動をしているスラムを2カ所案内していただきました。ここでLWSIは竹で編んだ粗末な教室で、子どもたちの教育支援を行なっています。どちらも生活環境は劣悪ですが、子どもたちはどこでも笑顔で私たちを迎えてくれました。彼らが大きくなっても笑顔でいられるために、私たちが少しでも力になることができるようにとの思いを新たにいたしました。

ブラジル派遣長期ボランティアから第一報！

2009年4月28日、JELAは長期ボランティアとして原田愛さんと中島涯(みぎわ)さんをブラジルに派遣しました。二人は6月末までサンパウロでポルトガル語研修を受け、7月からそれぞれの施設に赴任しました。まずは二人にブラジルの印象と抱負を語っていただきました。今後もJELA NEWSで活動報告をしてまいります。どうぞ二人の安全と活躍を覚えてご支援ください。

Muito prazer!
（はじめまして！）

原田　愛

４月にブラジルにボランティアとして派遣された原田愛と申します。今回で渡伯は３回目になります。

ブラジルでは大きな社会格差によって、多くの子どもたちが路上で生活していることを知り、自分もブラジルの子どもたちのために何かしたいと思い、JELAのプログラムに応募しました。やはり現在でも路上で寝ている子ども、物乞いをする子ども、物を売る子どもの姿がサンパウロの街にあり、それを見るのはとてもつらいです。

今はポルトガル語のレッスンを毎日受けながら、日曜日には南米教会の礼拝に出席しています。礼拝は日本語とポルトガル語で行われ、一度に両国語で歌われる讃美歌も不思議ですが自然で、とても気に入っています。教会の皆さんにはとても親切にしていただいています。

いよいよ7月からカーザ・マテウスでの活動が始まります。子どもたちの置かれている現状を知り、より多くの情報を日本の皆さんに伝えられればと思っています。

Saude!（健康に乾杯！）

中島　涯

日本福音ルーテル玉名教会の中島涯です。これからブラジルに2年間滞在する予定です。ブラジルに来てまず驚いたのは、実に色々な人種の人たちがいることです。アフリカ系、西洋系、アラブ系、アジア系、インディオ系など、特に今住んでいるのはサンパウロ市なので日系の方が多いですし、皆とても優しくしてくれます。

文化の違いで困ったのは、挨拶です。日本では「はじめまして」、「こんにちは」と声やお辞儀だけですが、ブラジルは違います。相手が男性であれば握手をして肩を抱いて挨拶をし、女性であればホッペにキスをします。日本では考えられない違いを体験しています。今はもう慣れましたが。

ブラジルに来て自分のキリスト教に対する信仰心が日本にいたころより強くなっ

「驕る平家は、久しからず」

JELA常務理事
長尾博吉

ＮＨＫ大河ドラマ「篤姫」をごらんになった読者には、お気付きの事と存じますが、幕府より大政を奉還されたばかりの、又国際世界に向かって開国したばかりの新しい日本政府は、政府の権威を保つため、旧弊を廃し進取の精神に富まんがために、様々な改革を実施しました。中には前号で触れましたような古い宗教体制の破壊（廃仏毀釈）と同時に、単なる先進国文化の模倣を嫌い、日本的文化を主張する必要から神社神道の極端な正当化を図る維新体制を取ったのでした。その結果、日本の宗教界は、一部の特定宗教を除き大勢としては明治維新政府の意向に添う方向に大きく流されて行きました。

このことは、キリシタン禁制の高札が降ろされ、公式に日本宣教を許されたキリスト教会においても同様であり、むしろ日本のキリスト教会は、日本政府によって正当に公認されたことを高く評価し、日本的キリスト教こそ我が国におけるあるべきキリスト教会の姿として自己評価したのです。しかし、戦時中は、本社団のみならず多くの宣教団体に属した宣教師は半強制的に国外追放されたり、世界の教会はキリストにあって一つであるにもかかわらず、日本だけ教会堂に日の丸の旗を掲げたり、主日礼拝の開式宣言の前に宮城遙拝をしたり、即ち、世界のキリスト教会において伝統的になされている様式以外のことを神学的検証も経ないで、偶像礼拝的な慣習を持ち込んだり、戦闘機献納献金をしたり、日本宣教は、外国人を排して日本人の手のみで為すべしと、これが日本的とは驚いた話です。

戦時中を静岡市内で、浮浪者のような生活を余儀なくされた宣教師が居られました。外出も許されず、無論本国との連絡は遮断され給与も着金しないため、心あるごく少数の信徒達の差し入れによって辛うじて命の灯火を繋ぐ始末でした。このような悲劇を生み出した原因は、日本政府が１５年戦争に国民総動員態勢を取るために制定した治安維持法にありました。この治安維持法によって、当時の日本政府は、国民から、思想・信条・信仰の自由、言論・結社の自由を奪い、国民個人の基本的人権を侵害したのです。

しかし、このようなことが何時までも続く筈はありません。やがて、戦争遂行資源が枯渇し、日本は軍艦も戦闘機もなくなり、市街地も焼け野が原となり、原爆を広島、長崎に投下されて敗戦の日を迎えたのです。「驕る平家は、久しからず」という言葉がありますように、非人道的、非民主的、差別的、高圧的、侵略的、覇権的政府が何時までも維持されるはずはなく、やがて自らの起こした戦争によって滅んだのでした。この間、米国系の本社団はただ、ただ静観するより他なかったのです。

ているのを感じます。その理由としては、ブラジルに来た日本人をこんなにも暖かく向かえてくださる教会の方々を通して大きな恵みを実感していること、またJELAによって派遣されていることでキリスト教をもっと理解しなければならないという自分自身の責任を自覚し始めたからだと思います。徳弘先生、大野先生、教会の皆様には大変お世話になり、感謝しています。

今月末でポルトガル語レッスンは終わり、7月からポルトアレグレの子どもの施設での活動が始まります。ポルトアレグレでも、もっと自分自身や施設の子どもたちと共に信仰を深めていけたらと考えています。そして僕と出会う子どもたちが一人でも多く、僕と知り合えて「良かった」、「楽しかった」と感じてもらえるような活動をしたいと願っています。

ミリアン先生（右）とポルトガル語の勉強をする原田さんと中島さん→

ブラジル出発前の打合せで　　左より　古川事務局長（当時）、石丸哲平さん（前ブラジル・ボランティア）、原田愛さん、中島涯さん、中川理事長、徳弘牧師（JELC派遣ブラジル宣教師）

30年以上職員としてJELAを支えてくださった古川文江さんが、去る3月末日常務理事・事務局長を退任、6月末日をもって退職されました。文字どおり「JELAの顔」として大きな貢献をなさいました古川さんの新しい人生に、主の導きと祝福を祈ります。

退任にあたって

前常務理事・事務局長　古川文江

「私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます」

救い主イエス様の聖名を賛美いたします。

1978年秋、私は一人の若いアメリカ人女性と出会いました。日本語学習の期間、保谷教会に初めて派遣されたJ-3でした。当時の私は受洗後数年を経過してはいたものの、海外から多くの宣教師を受け入れているJELCや、ましてやルーテル宣教師事務所（当時のJELAの通称名）の存在など全く知らず、ただ自教会での教会生活を楽しんでいる信徒でした。

そのJ-3によってJELAが二人目の職員を募集していることを知った私は早速履歴書を送り、4名の宣教師の面接を受け、そして1979年3月にJELAの職員として採用されました。以来30年と4カ月、信仰的にも能力的にも全く不足している者を、主はJELAの働きを通して実に豊かな恵みをもって養ってくださいました。

JELAは今年の6月21日で創立100周年を迎えました。過去の長い間、アメリカのルーテル教会からJELCに派遣される宣教師のための事務所として機能し、存在してきたJELAですが、1980年代初めに難民支援に係わり始め、その後、世界の子ども支援、ボランティア派遣、ハープ・ミニストリーと、公益法人の本来の働きへと導かれてきました。また事務所も2004年にルーテル市ヶ谷センター内から恵比寿へ移転し、職員も増え、事業をさらに力強く展開するようになりました。JELAの画期的な変化と成長の時期に、奇しくも私は在職し、その働きに深く係わることが許されたと言えます。

日本社会の中でクリスチャンとして生きることは時に困難であり、職場で信仰を隠さざるを得ないと耳にすることがありますが、幸いにも私にはそのような経験がありません。冒頭に掲げたのは現在のJELAのミッション・ステートメントですが、そこで謳われているように、イエス様を信じる信仰とルーテル教会との係わりの中で30年に渡ってJELAの公益事業と宣教師支援業務に携われたこと、また、良き職場、良き師、良き上司、良き先輩、良き仲間に恵まれたことは、主からいただいた大きな恵みであり、宝であることを覚えて深く感謝に絶えません。

JELAが100年を数える同時期の6月末に私は定年を迎え、JELAを退職いたしました。事務局長在任は2年3ヶ月と短期間でしたが、これまで皆様からいただきましたお励ましとご厚情を覚えて心からお礼を申しあげます。私の配慮の至らなさから皆様方にご迷惑をおかけいたしましたことは、どうぞイエス様の愛をもってお赦しくださるようお願いいたします。

公益法人改革法により新しい公益法人へと移行準備を進めているJELAは、正に次の新しい100年へと歩みを始めました。中川理事長と森川事務局長のリーダーシップの下、JELAがますます主によって祝福され、その使命をさらに力強く全うされますよう祈りに覚えています。支援者の皆様方もより一層のご支援をJELAに賜りますよう心よりお願申しし上げます。感謝。

お知らせ

JELA創立百周年記念行事

JELAはこの6月21日で創立百周年を迎えました。この記念すべき時に、改めてこれまでの年月を振り返り、主の豊かな導きと多くの皆様方からの温かいご支援を覚えて、心から感謝する次第です。つきましては、以下の催しを実施しますので、ここにご案内申し上げます。ご出席をご希望の場合は、会場手配の都合上、事前にJELA事務局までご連絡くださいますよう、お願い申し上げます。

＜記念礼拝＞
9月22日(火・祝日)午前10時～11時半
JELAミッションセンターにて
(東京都渋谷区恵比寿1-20-26
電話03-3447-1521)
説教者:アンドリュー・エリス牧師

＜感謝パーティ＞
正午～午後2時、JELA近辺にて

予告

九州ルーテル学院でチャリティコンサート

11月13日(金)夜に同学院と共催で、世界の子どもを支援するためのチャリティコンサートを開催します。会場は九州ルーテル学院大学チャペル、演奏者は高度なテクニックと美しい音色に定評があるピアニストの野原みどりさんです。野原さんは、1992年ロン＝ティボー国際コンクールで優勝を飾り、以来、ロリン・マゼール、小澤征爾など名匠と共演するなど国際的な活躍を続けておられます。

東京でチャリティ・パーティ

毎年恒例の「ワインとチーズのパーティ」を、JELAミッションセンターで12月4日(金)の夜に開催します。世界各国ののワインを飲み比べていただき、お気に入りのワインをその場で安くご購入いただける催しです。参加者持ち寄りの品物を景品とするビンゴゲームも計画しています。パーティの収益は世界の子ども支援に用いられます。詳細は改めてご案内いたします。請うご期待。

日本福音ルーテル社団(JELA)職員募集

JELAはこのたび、経理・総務業務を中心に従事していただける職員を募集します。キリスト教の宣教・教育・社会福祉に関する公益事業を進めるJELAの働きに関心のある方は、下記要領に従いご応募ください。

募集職種:一般事務(経理及び総務業務)
募集人数:1名
雇用形態:正職員(入社後3ヶ月間は試用期間)
勤務地:JELAミッションセンター
(東京都渋谷区恵比寿一丁目20番26号)

待遇:①給与・賞与・手当＝当社規定による。
②勤務時間＝9:00 ～ 17:00
③休日・休暇＝完全週休二日制(土・日)。休暇は当社規定による。
④福利厚生＝各種社会保険あり。

応募条件:
①高校卒業以上の方。
②コンピュータの基本ソフト(ワード、エクセル等)が使いこなせる方。

提出書類:
①履歴書(自筆、提出日より3ヶ月以内に撮影された本人の写真を添付)
②職務経歴書
③最終学歴校卒業証明書
④クリスチャンの方は信仰経歴書(フォーム自由)

(※1)最終面接に進まれた方には、直近3ヶ月以内の健康診断書のご提出をお願いする予定です。
(※2)不採用の際は、提出書類を返送いたします。

提出期限:2009年9月30日(当日の消印有効)
提出先:東京都渋谷区恵比寿1-20-26
日本福音ルーテル社団(JELA)職員募集係
選考方法:書類選考、面接、作文

選考スケジュール:
書類選考＝10月中に結果を通知。
面接＝11月末までに実施。
内定通知＝2009年12月上旬ごろ。
入社時期＝2010年1月1日(面接時に応相談)

以上

支援者一覧

(2009年3月1日～6月30日)

● 各プログラム支援献金

明比輝代彦／荒井梯次郎・和子／安藤淑子／飯野タケ／石澤とし子／石田浩子／石原寛／石森京子／泉真琴／市ヶ谷教会／稲葉やよい／岩崎高紀／上原文子／植松美江／内海健寿／江澤妙子／大塚眞佐子／大中真理／岡田鞆恵／小川晶人／加藤久子／川上範夫／神吉紀子／京谷信代／釧路教会／倉重ミドリ／小菅可代／小松かつみ／小宮俊作・武子／佐藤義雄／清水沢子／白髭市十郎／杉浦りえ／鈴木辰典・米子／鈴木春子／鈴木やす／鈴木泰子／瀬戸口久美子／高田紀子／高津和子／高橋寿子／高橋ふく子／高橋悠美子／高橋佳子／玉名教会／塚田政司／辻昭子／鳥居和代／長尾博吉／中川陽子／中島千麻子／中村敬子(パッチワークの会)／西垣親子／芳賀明子／早瀬康平／原田愛／ハーベスト・タイム・ミニストリーズ／日野原真紀／平田幸子／平林洋子／藤井浩・礼子／藤橋日出子／古川セツ／紅林真由美／ベンケ・パトリック／宮本瑠美子／牟田青子／毛利庄蔵／森保宏／森田雅子／八坂由貴子／山県順子／山際喜佐夫／山崎恵美子／山下克己／山田克子／山本一男／山本了／吉田員子／若原奇美子／和田雪香／Augustana Lutheran Church／Elk Horn Lutheran Church／　他匿名複数

● 賛助会費

飯野タケ／倉知延章／小坂敦子／桜井永之／佐藤玲子／三五康子／高橋要子／中村雍子／深澤理香／本多広高／　他匿名複数

以上、敬称略。ご協力ありがとうございます。なお、匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集後記

創立百周年を迎えたJELAは、9月に記念イベントを行います。過去に来日奉仕され、今は米国にお住まいの宣教師の先生方にご案内を差し上げたところ、40名近い方からご出席の返事をいただきました。昔の思い出とともに、招待された喜びと感謝の言葉を返してくださる方もたくさんありました。文化がまったく異なる国へやってきて、人々と生活を共にし、キリストの福音を伝える貴い奉仕に打ち込まれた、あるいは打ち込んでおられる、すべての宣教師の方々に、心より感謝いたします。「一生の終わりに残るものは、我々が集めたものではなく、我々が与えたものである」(ジェラール・シャンドリー)(M)

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association
日本福音ルーテル社団